

作物名：大豆

病害虫名：べと病（病原：*Peronospora manshurica*）

1 被害の特徴と診断のポイント

- 主に7月以降の比較的温暖で雨の多いときに発生する（写真1）。葉に円形または不規則な形の黄白色の病斑ができる（写真2）。古くなると黄色がかった褐色になり、病斑の周囲は濃褐色になる。病斑の葉裏側には綿毛状の灰色の菌そうが盛り上がる（写真3）。菌そうの色は、乾燥してくると灰色がかった黄色～褐色を帯びた紫色に変わる。多発すると落葉期が早まる。
- 種子では、種皮に灰色がかった黄色の斑紋が現れ、その上に乳白色～黄褐色の菌糸がうすくからむ（写真4）。



写真1 多発した株

2 伝染源・伝染方法

- 種子表面や被害残さの卵胞子が一次伝染源となる。翌年、分生子を形成、飛散し、気孔などから侵入し、感染する。

3 発病しやすい条件

- 本県では、7月中旬以降に病斑が多くみられるようになる。特に、密植、過繁茂により風通しが悪くなると多発する。

4 防除方法

（1）耕種的防除

- 健全種子を使用する。
- 発病の程度には品種間差があるので、発病しにくい品種を栽培する。本県主要品種では、「ミヤギシロメ」、「タンレイ」の順でべと病粒（被害粒）の発生が多く、「タチナガハ」及び「あやこがね」では発生がほぼ認められない。
- 過繁茂とならないよう肥培管理に留意する。
- 被害茎葉は、ほ場に残さないよう適切に処理する。
- 連作を避ける。

（2）化学的防除

- 多発ほ場では、病勢が激しくなる前に茎葉散布剤による予防防除を行う。

5 出典

（1）参考文献

- みやぎの麦類・大豆栽培技術指導指針（宮城県）
- 農業総覧 病害虫防除・資材編1（農文協）
- 植物防疫 第73巻第3号:44-48（日本植物防疫協会）
- 日植病報 61:166-168

（2）写真

- 宮城県病害虫防除所撮影



写真2 発病葉（表面）



写真3 発病葉（裏面）



写真4 菌糸に覆われた子実

（令和5年9月改訂）